

草ずり曳

荻江 全詞章

荻江節

曾我物・草摺引物

走りかかつて草摺を、春のはじめの寿と、引つ引くとも引つちようべい、勝つ引くとも勝つてふべい

引けど、動かぬ金輪際よりはへぬきの、しかも、大々神楽で、天の岩戸を、引きすて給ふおもしろや

〔時致〕身は盤石の、お若衆なりともあくまで、引かば動かじ

動く気色はなかりけり、朝比奈ほつとも手あまし、しやれが高じて喧嘩の種よ、扱ひになりすました

〔せりふ〕 しゃんしゃん

下に見えるは奴でござんすかの、てもよく似たつり髭じゃ、髭が似たとて奴でござんすなら、どちよう鯨が、みんな奴で奴でござんすかの、しや、ほんにおかしなことでござんすかの

〔力比べ〕 別足踏みしめ時致は、はや駆け出でんとするところを、朝比奈なほもせり上り、引くにとまらばこらえて見よ

〔せりふ〕 モサモサモサモサ

持ったる腕骨引きぬくか、お力じまんのお若衆さま、こんこん拳がやれやれきてきて、くじけてのくかや、そこはなせ、なりやせぬじやまなる、つら憎や、はなせ、とめたとめた万人のあららげて、草摺三枚引きちぎって双方へぱつとぞのいたりける

あっぱれ古今の勇力やと、貴賤上下押しなべてみな、恐れぬものこそなかりけれ